

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 30 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520038

研究課題名(和文) アリストテレス倫理学書の成立史及びヘレニズム時代への影響史

研究課題名(英文) The Development of the Ethical Treatises of Aristotle and its Influence upon the Hellenistic Ethics

研究代表者

荻野 弘之 (Hiroyuki, Ogino)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：20177158

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：1980年代の「徳倫理学」の復興以来注目されているアリストテレス倫理学を、従来のように、単に『ニコマコス倫理学』だけで解釈するのではなく、『エウデモス倫理学』『大道徳学』『徳と悪徳について』といった(参照される機会が殆どなかった)複数の著作やヘレニズム時代の偽作との比較検討を含めて、成立史、影響史を立体的に考察する。

この作業を通じて、「善美」「思慮」「幸福」「友愛」などの諸概念をめぐるアリストテレス倫理学を単なる一枚岩の体系としてではなく、複雑な可能性の芽を孕んだ思想の培養基として理解する道を開く。これによって最近の英米でのアリストテレス研究の水準に追いつくことが可能になった。

研究成果の概要(英文)：This project focuses on the minor neglected works of Aristotle's ethical treatises: The Eudemian Ethics, Magna Moralia, and The Virtues and Vices, from the developmental point of view, comparing to the Nicomachean Ethics which has inspired the idea of the virtue ethics in the U.S. since 1980s. These works have not been mentioned as any sources or references for the reconstruction of the authentic Aristotle's moral philosophy in the domestic academic communities, although A. Kenny and J. Cooper made progress in the field of comparative studies of Aristotle's ethics. Many studies and translations in the European languages of these works have been published in these 10 years. This project sheds light upon the revision of some moral concepts of Aristotle: moral excellence (kalokagathia), practica wisdom (phronesis), well-being (eudaimonia), and friendship (philia). Aristotle's ethical theory cannot be understood as a monolithic scheme but as a flexible system of plural possible theories.

研究分野：哲学、西洋古代哲学史

キーワード：アリストテレス 倫理学 ヘレニズム 発展史的研究、『エウデモス倫理学』 徳倫理学 実践的賢慮 コーチングと徳の涵養

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1960年代以降の英語圏における分析哲学的手法による行為論の新展開(アンスコム、デイヴィドソン、サール) また1980年代以降米国を中心に復興著しい「徳倫理学」(マッキンタイア、フット、ハーストハウスら)の媒介となってきたのは、常にアリストテレスの倫理思想であった。20世紀のアリストテレス研究は、孤立した文献学・哲学史研究としてではなく、こうした実践哲学全般の研究と相互に刺戟しあいながら進展してきたといえる。

(2) ただしアリストテレスを論じる際に(主著とされる)『ニコマコス倫理学』のみが参照されるだけで、僅かな例外(アレトなど)を除けば、他の倫理学書を参照する作業は殆どなされてこなかった。もう一つの倫理学著作である『エウデモス倫理学』は19世紀以来、別人(弟子エウデモス)の著作として解されてきたが、1920年代にW.イエーガーの発展的研究によって、ようやく真作としての評価が定着した。また『大徳学』は従来ヘレニズム時代のペリパトス学派による学説の要約であるとされてきたが、近年クーパーはこれを真作であるとする新説を発表して、学会に波紋を投げかけた。それでも『ニコマコス倫理学』以外の著作は『徳と悪徳について』を含めて、依然として哲学ではなく、もっぱら文献学の研究対象とされていた。

(3) こうした状況にあって、国際的な学会の開催(1969年オランダ)や原典の新しい校訂本の刊行(オクスフォード古典叢書1991年)以後、ケニーやロウ、ブローディー、ウルフなど主に英国の研究者を中心に『エウデモス倫理学』や『大徳学』の読み直しが進捗し、二一世紀に入ってから、フランス語、イタリア語、スペイン語、現代ギリシア語での新しい翻訳書、研究書の刊行が相次いでいる。現在では『大徳学』の偽作説を採る保守的な論者(アーウィン)であっても、こうした複数の倫理学書を参観することが方法論上の当然の前提だと考えられて認識が共有されつつある。

(4) こうした国際的な研究動向の進展にあって、遺憾ながらわが国においては殆ど未開拓なままの状況にある。たとえば1970年代初頭に『アリストテレス全集』(岩波書店)が刊行されて、ようやく本邦初訳(茂手木元蔵訳)が収録されて以来、『エウデモス倫理学』の抄訳(加来彰俊訳、世界の名著、中央公論社)が刊行されたにすぎない。アリストテレスの倫理学を単一の体系としてではなく、時系列的な視野の中で、様々な思想的可能性を孕んだ萌芽的構想の一面面として複眼的に読むという方法論はほとんど進展していない。事実、日本哲学会、日本倫理学会、日本西洋古典学会などの全国学会での研究発表の題目とその内容にもこうした事情は

反映されている。

(5) 本研究は、以上のような国際的な研究の現状を視野に入れた現状認識に立ち、欧米での研究を参観した上で、わが国における古代哲学研究の欠落を埋めるとともに、国際的なレベルでそれを超える先端的な研究開発を準備するための基盤研究を目指すものである。

## 2. 研究の目的

本研究が目指す目標とその特色は、以下の通りである。

(1) 『エウデモス倫理学』の精密な読解によって、従来のアリストテレス倫理思想の理解や前提を幾つか修正する。

ヘレニズム時代に顕著になり、キリスト教倫理にも引き継がれる「徳目」のカタログ化の問題。これは徳倫理学の基礎概念に関係する研究である。

倫理思想の発展を唱導するイエーガー説の論点の一つでもあった実践的な思慮(フロネーシス)の概念の発展史的理解の妥当性の検証。これには文献的研究とともに分析哲学的な手法も必要となる。

願望、選択、思案、本意など行為論を構成するアリストテレス倫理学の基本概念のモラル・サイコロジ的な分析。

(2) 『徳と悪徳について』は小著であるだけに、欧米でも本格的な研究は見当たらない。これは前1世紀以降の折衷主義哲学の所産としてストア派やアカデメイア派の影響関係を視野に入れて、アリストテレス主義の史的展開として適切に位置づけることを目指す。これは国際的に見ても先駆的な業績となりうる要素をもつ。

(3) 英米圏の分析哲学的な行為論の成果(ダーウォールによる二人称的義務論など)を摂取した上で、文献学にとどまらない道徳哲学の可能性を探る。これは『ニコマコス倫理学』においてはかなり開拓されてきたが、その方法論をさらに拡張して、他の著作の精密な読解によって、『エウデモス倫理学』や『大徳学』にも十分に適用可能である点を示す。

(4) 最終的には、

これらの倫理学書の(新しい校訂本を底本とする)新訳の提示。

Clarendon Aristotle Series(オクスフォード大学出版局)に範をとった、綿密な哲学的註解。

個別の論点に関しては、学会誌、哲学専門誌や大学紀要を媒体とした論文。

の三つの形態で、専門学会のみならず、哲学思想史、倫理学、西洋古典学などの隣接領域の研究者、一般読書界にも貢献することを目指す。

本研究は何よりも古典的なテキストに即した地味な文献的研究ではあるが、それだけ

に尽きない野心的な展望をも併せ持つものである。細部の正確な読解がアリストテレスの理解を大きく変えて、解釈に影響を及ぼした過去の事例は内外の研究史を省みて枚挙に暇がない。

### 3. 研究の方法

(1) アリストテレス倫理学に関しては、近年英語圏をはじめとして、徳倫理学や分析哲学的行為論を含めて、翻訳書・研究書の新刊、復刻本の刊行が相次いでいることから、古書を含めて組織的にこれらの文献を蒐集する。また既存の(上智大学中央図書館を中心に)国内図書館所蔵の文献を活用して調査を進める。

(2) こうした文献研究・調査を下敷きにしたうえで、月一回程度の定期的な研究会を開催する。これは研究代表者を中心として分担者、協力者、内外のゲストを交えた報告・討議を相互に積み重ねる形で進める。会合には上智大学の個人研究室、文学部哲学科の共用室、図書館や研究所の施設をできるだけ有効に利用する。

(3) 分担者のうち、

早川研究員(平成24年度まで)は、現代哲学の方面から独自のサーベイ、資料調査の準備のほか、研究会での記録の作成、連絡業務などを分担する。

佐良土研究員(平成25年度から)は、早川研究員の業務を引き継ぐとともに、徳倫理学の研究方面からのサーベイのほか、コーチングについての研究により、文献的な研究を超える現代的な応用の可能性についても研究の射程を拡げる。またインターネット上の研究リソースについても調査を進める役を担う。

研究協力者は、卒業生、大学院生から成り、討論に参加して研究の実際にあふれるとともに、資料の整理などを手伝う。

外国大学の研究者とは現地での資料調査の際の支援を依頼するとともに、意見交換を通じて、欧米での研究情報をうる窓口としての役割が期待される。

(4) 国内外の研究者との意見交換や研究交流の会合を随時行なう。また夏季休暇を利用して、海外の研究機関、研究者と連携しつつ、19世紀以前の文献調査、新しく発見された写本の調査、意見交換を行なう。

### 4. 研究成果

四年間にわたる集中的な研究で得られた知見は凡そ以下の通りである。

(1) 「幸福」の概念についての再考。

『ニコマコス倫理学』と『エウデモス倫理学』での叙述の相違を勘案することが最も重要

な概念の一つ。これは文献学的な成立史のみならず、ブータン国王が提唱した「国民総幸福」(GNH)をきっかけに近年注目を浴びている社会学、心理学、経済学からの「幸福の科学化」についての批判的視点を提供することに繋がる。

具体的な成果としては、英文での論文をはじめ、日本アスペン研究所での発表、一橋大学大学院国際経営政略研究科での講義(英語)を通じて、経済史学、経営学や国際関係論など隣接分野の研究者とも交流を図ることができた。

(2) 「実践的な知恵」を意味する思慮(フロネシス)の概念の再考。

この問題をどう理解するか、『ニコマコス倫理学』と『エウデモス倫理学』ではっきりと違った用法を示すのかどうかは、倫理学書の成立史と影響史を考える上での鍵概念の一つとなる。これについても哲学会大会での発表を基に紀要論文に掲載したが、この「フロネシス」の概念が、他の分野での注目を集めていることが研究の過程で明らかになったのは予想外の成果であった。

具体的な成果としては一橋大学ナレッジ・インスティテュート(野中郁次郎、一條和生)、日本精神病理学会(松浪克文、熊崎努)などの研究者との交流がきっかけで、講演や講義を行なった。

(3) 『徳と悪徳について』は前1世紀以降の折衷主義哲学の所産であるが、明らかな偽書とされるテクストを読む意味がどこにあるかを考える格好の実例でもある。「紀元前後におけるアリストテレス主義の復興」という古代哲学史のトピックについてはすでにソラブジの浩瀚な研究があり、研究代表者・荻野が2009年にケンブリッジ大学での学会に参加した経験があるが、この問題についても今後の本格的な研究のための基盤を整備することができた。

(4) 分担研究者のうち、早川研究員が担当した現代的な「ケアの哲学」における行為者の問題は近年関心が高まっているトピックである。そこにアリストテレス倫理学がいかに寄与するかについては、人称的世界構成の理論や幸福論との関係が予想されるものの、まだ萌芽的な考察にとどまっており、今後の進展が課題である。

(5) 分担研究者のうち、佐良土研究員が担当した現代的な「コーチングの哲学」との関係では、興味深い副産物が幾つか得られた。徳倫理学における「勇気」や「矜持」といった古代ギリシアのポリス社会で高く評価された伝統的な徳目の形成メカニズムが、チーム・スポーツをモデルとしてうまく説明できることは、当初からある程度は予想されたことではあるが、バスケットボールのコーチングという具体的な経験を基にして予想以上に長い射程をもった概念であることが実証されつつある。コーチングの技法は近年スポ

ーツのみならず学校教育以後の社会人教育や企業内研修の場でも重要視されているが、これにアリストテレスの規範的倫理学、徳の理論が適格的だとすれば、古典研究が同時に極めて大きな現代的射程をもつことにもなり、グローバル社会の状況下で新しい応用倫理学の分野を切り開く意味でも、今後の発展が期待できる成果である。

(6) 助成金交付期間(平成23-26年度)中に発表した成果は下記の一覧表の通りであるが、これ以外に2015年以降にも引き続き成果が発表・刊行される予定である。

『アリストテレス全集16』岩波書店  
『エウデモス倫理学』『徳と悪徳について』について新しい校訂本(OCT, 1991年)に基づき詳細な注解・索引を付した新訳

『理想』(2016年3月刊行予定)イエーガーの「アリストテレス」の翻訳

『哲学科紀要』(2016年3月刊行予定)アリストテレスの徳論に関する論文

(7) これらの研究は、海外の研究協力者とも連絡を取りながら進められているので、近年のうちにこれらの研究協力者を通じて、また外国語の発表媒体を通じて研究成果が伝えられることになることが期待される。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

— Hiroyuki OGINO (荻野弘之), The Common Goods, Happiness, and the Meaning of Life, *Philosophical Studies* (上智大学文学部『哲学科紀要』), 41, 2015, pp.1-15 (査読無)

— 荻野弘之 Aristotle, The Eudemean Ethics 日本西洋古典学会『西洋古典学研究 LXIII』岩波書店、2015, pp.142-147 (査読有)

— 荻野弘之 「賢慮(フロネーシス)について - アリストテレスにおける知識と行為の一側面」上智大学文学部『哲学科紀要』 39, 2013, pp.1-19 (査読無)

— 荻野弘之 「フロネーシスと実践的知識の構図」日本精神病理・精神療法学会『臨床精神病理』33/3, 2012, pp.267-270 (査読有)

— 荻野弘之 「多様な対話空間を求めて」日本アスペン研究所『アスペンフェロー』23, 2012, pp.3-7 (査読無)

— 荻野弘之 「よく生きるとは何か」日本ア

スペン研究所『アスペンフェロー』22, 2012, pp.3-9 (査読無)

[学会発表](計5件)

— 荻野弘之 「レトリカについて」日本アスペン研究所、人事院研修所(埼玉県入間市)2014年8月6日(招待講演)

— 荻野弘之 「賢慮について」哲学会第51回大会、2012年11月3日、東京大学文学部(招待講演)

— 佐良土茂樹 (シンポジウム・コーディネーター)「私のバスケットボール研究」日本バスケットボール学会第一回大会、2014年12月20日、日本体育大学世田谷キャンパス

— Shigeki SARODU (佐良土茂樹), Aristotle on Honor and Shame as Moral Motivation, at "Bounds of Ethics in a Globalized World, 2014年1月7日 Christ University, Bangalore, India (学会名「グローバル化した世界における倫理的紐帯」インド国バンガロール市、クライスト大学)(応募発表)

— Seisuke HAYAKAWA (早川正祐), Rethinking Individualistic Conceptions of Care in Philosophy of Action, グローバル COE「死生学の展開と組織化」2012年3月15日、東京大学文学部(応募発表)

[図書](計4件)

— 荻野弘之 『世界人名事典』(うち、西洋古代哲学の160項目担当)岩波書店、2013年、3586頁  
<https://www.iwanami.co.jp/moreinfo/0803150/top.html>

— マシュー・リップマン『子どものための哲学授業』河野哲也・清水将吾・神戸和佳子・小村優太・榊原健太郎・佐良土茂樹(担当p.147-178,353-363)・高山花子・瀧将之・中村信隆・野村智清訳、河出書房新社、2015年、384頁

— フィル・ジャクソン、ヒュー・ディールハンティー『イレブン・リングス - 勝利の神髄』佐良土茂樹・佐良土賢樹訳、スタジオタッククリエイティブ、2014、368頁

— ニコラス・ロンバルド「トマス・アクィナスにおける感情論」佐良土茂樹訳『カ

トリック研究』(上智大学神学会)82,  
2013 pp.91-127(査読有)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕(計1件)

早川正祐「ケアと行為者性の哲学 ゆれ動くものとしてのケアと行為者性」東京大学大学院人文社会系研究科課程博士論文 2013年3月6日提出

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

荻野 弘之(OGINO, Hiroyuki)  
上智大学・文学部・教授  
研究者番号: 20177158

### (2) 研究分担者

早川 正祐(HAYAKAWA, Seisuke)  
三重県立看護大学・看護学部・准教授  
研究者番号: 60587765

佐良士 茂樹(SARODO, Shigeki)  
上智大学・哲学研究科・研究員  
研究者番号: 40711586

### (3) 研究協力者(のべ5名)

波多野 知子  
学習院大学・文学部・非常勤講師  
(平成24年度まで)

三浦 太一  
ロンドン大学・大学院博士課程  
(平成25年度まで)

荒幡 智佳  
上智大学・大学院博士後期課程  
(平成24年度から)

桑原 司  
上智大学・大学院博士前期課程  
(平成25年度から)

赤堀 愛美  
上智大学・大学院博士前期課程  
(平成26年度から)

(4) 海外の研究協力者(5名)  
クリストファー・ロウ  
ダラム大学(英国)・名誉教授

デイヴィド・チャールズ  
オクスフォード大学(英国)・教授

フランシス・ヴォルフ  
パリ高等師範学校(フランス)教授

ジョン・フェラーリ  
カリフォルニア大学(米国)教授

アンソニー・ロンゲ  
カリフォルニア大学(米国)名誉教授